

## 琉球から見た『椿説弓張月』

島村, 幸一 / シマムラ, コウイチ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

233

(終了ページ / End Page)

253

(発行年 / Year)

2015-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010704>

# 琉球から見た『椿説弓張月』

島村 幸一

## 〈はじめに〉

滝沢馬琴が書いた『鎮西八郎為朝外伝 椿説弓張月』は、文化四年（一八〇七）から文化八年（一八一二）にかけて上梓された「前篇六冊」（第一回～十五回）、「後篇六冊」（第十六回～三十回）、「続篇六冊」（第三十一回～四十五回）、「拾遺篇五冊」（第四十六回～五十六回、員外一条）、「残篇五冊」（第五十七回～六十八回、為朝神社并南嶋地名并略）都合二十九冊にも及ぶ長編の読本である。刊行は五回にわたり、「前篇」が「文化四年丁卯（一八〇七）春正月」、「後篇」が「文化五年戊辰（一八〇八）正月」、「続篇」が「文化五年戊辰冬十二月」、「拾遺篇」が「文化七年庚午（一八一〇）八月」、「残篇」が「文化八年辛未（一八一二）三月」である。

『椿説弓張月』の「前篇」が上梓された文化四年（一八〇七）正月は、文化三年（一八〇六）六月十三日に琉球を出発した尚瀬王襲位の謝恩使の江戸立（江戸上り）の使節が、同年十一月十六日に江戸に着き、江戸での日程を終えて、江戸を立つ十二月十九日の直後である。『椿説弓張月』の挿絵を描いたのは、後に「琉球八景」（一八三二年）を描いた葛飾北斎である。『椿説弓張月』は、江戸立で湧く琉球ブームを当て込んで刊行されているのである。朝鮮通信使の江戸期の渡来は、都合十二回。一六五五年より將軍の代替わりごとに派遣され一八一一年の最後のものは江戸

には来ていなく、対馬での「聘礼」で済ませている。江戸に来たのは、一七六四年の徳川家治の時のものが最後である。この年は、読谷山王子朝恒を正史とする賀慶使も江戸に来ていますが、以降江戸を訪れる「異国」の使節は琉球の使節だけとなり、琉球の江戸立は益々注目される。『弓張月』の刊行は、それを当て込んだと想像される。

『弓張月』が、当時相当に評判になったのは「後篇」と「続篇」が上梓された同じ年の「文化五年十月、大阪の佐川藤太がこれを鎮西八郎蒼弓勢という浄瑠璃に改作したが、同年十一月には道頓堀中の芝居の顔見世狂言として島巡月の弓張という名で上演された。この後、弘化四年（一八四七）にも上演、明治以降にも弓張月の劇化はしばしば行われた（途中省略）読本の作を浄瑠璃・歌舞伎に作りかえることは、文化当初には殆ど例がなかったことで、これによっていかにこの弓張月、ひろくいえば馬琴の読本の世評がまびすしかったかが推定され」という。また、『弓張月』を簡易化した合巻に作りかえた藤寿亭松竹『為朝一代記』天保九年（一八三八）、柳下亭種員『源氏雲弦月』嘉永四年〜六年（一八五二〜一八五三）、楽亭西馬『弓張月春宵栄』嘉永四年〜慶応三年（一八五二〜一八六七）が世にあらわれ、『弓張月』の「模倣作」であるという読本、東西庵主人『為朝外伝琉球軍記』天保五年（一八三四）、『絵本豊臣琉球軍記』天保七年（一八三六）、合巻、岡山鳥『為朝外伝上絃筑紫敷』文化十年（一八一三）もでたという。<sup>1)</sup> 琉球にかかわる言説は、袋中の『琉球神道記』などが大きな影響を及ぼしたと考えられるが、『弓張月』は一部の知識人や国学者等に影響した『琉球神道記』等の「琉球言説」を越えた影響を広く及ぼしたと考えられる。『弓張月』が本土日本での「琉球認識」に大きな影響があることは琉球側でも認識されており、明治二十六年（一八九三）に琉球芝居が始めて「本土に上陸して公演を果たす」際に、第一番目の演目として演じられたのが「四人の童女が、髪を垂れ、陣羽織を着て登場し、祭壇の弓箭を左右の手に持って舞う」、「国の寿（一名弓取）」で、これは「為朝が強弓でもって琉球を征服統一したので、その故事にならって制せられた」ものだという。琉球側の認識として、これが日本において「受けがよい」演目であることをねらったのである。<sup>3)</sup>

しかし興味深いことは、これまでの琉球研究において『椿説弓張月』はほとんど研究の対象にされていないことである。ややめぼしいところでは、伊波普猷の『弓張月』の毛国鼎が辞世の歌に就いて（『古琉球』再版、糖業研究会出版部、一九一六年刊所収。初出は『沖繩毎日新聞』一九一一年十一月三日）と池宮正治の『弓張月』における中山伝信録の影響―人物名を中心にして―（『琉球文学』創刊号、琉球大学琉球文学研究会、一九六九年刊）があるくらいである。<sup>4</sup>この内、池宮論文は『弓張月』が執筆されるのにあたって資料になっていた『中山伝信録』（正確には、明和二年（一七六五）にでた和刻本が利用されたと推測される）に登場する人物が、『弓張月』の登場人物になつてゐることを論じており、『弓張月』の作製に琉球側の資料が利用されていることを具体的に示した研究である。伊波論文は論文ともいへぬ短い論だが、『弓張月』において優柔不断で愚かな王と描かれる「寧王」にひたすら誠実に仕える忠臣「毛国鼎」が、「佞臣利勇」等によつて死に追いやられることになる時の辞世歌が、琉球では座を開く時に「かじゃでい風」の節で歌われる頌歌「今日の誇らしやや なをにぎやな響る 蕾でおる花の 露きやたごと」（今日の嬉しさは何に譬えよう。菊の蒼が露にふれてひらくような誇らかな嬉しさだ）であることを指摘したものである。これは、荻生徂徠の『琉球聘使記』に入る同歌が「無常を觀ずるこ、ろ言葉の、和歌の句調によく称ひて三十一字となりぬるこそ殊勝なれ」と大きく誤解され、さらにそれを森島中良の『琉球談』で「此歌は生者必滅の意を本とせり、いかさまに挽歌めきたり」としているのを、馬琴が『弓張月』で頌歌とは正反対の辞世歌として使つてゐることを指摘している論である。伊波は「満州語まで研究したといふ徂徠先生も、この琉歌の解釈にはチト閉口されたやうである」と記しているが、江戸期の国学者等が琉球の実体、内実をよく理解できていないことを、「毛国鼎」の辞世歌を例にして述べている。

「今日の誇らしやや」の琉歌が、国学者等に誤解されていることについては、嘉手苅千鶴子が「琉球文学にみる『露』の呪力」において、琉球と近世日本における「露」の理解が大きく異なつてゐることを指摘している。<sup>5</sup>加えて

考えなければならぬことは、その一方で「琉球人」の作った和歌が、一定程度「正確」に国学者達に伝わっていることである。この琉歌と「琉球人」の和歌との対照的な伝わり方は今後の課題であるが、三味線音楽とともに謡われ、「日本人」達にもつばら耳で聴取された琉歌と短冊に書かれて交わされたと推測される和歌との違いでもあり、また一方が琉球風のものとして受けとられ、もう一方が大和文化が及んだものとして受け入れられたという二つの大きな文芸の享受のされ方の問題として、今後考えられなければならない。<sup>6)</sup>それはともかくとして、琉球研究においては日本側の「琉球認識」に大きく影響していると考えられる『椿説弓張月』が大きくとりあげられて来なかったのは、これが琉球の内実を反映していなく歴史的時間の推移の不整合が存在する荒唐無稽の小説であり、論ずるに値しない作品であるという沖繩学の認識があったからだと思われる。これは、薩摩の琉球侵略を題材にした「薩琉軍記」といわれる一群の近世軍記が、従来、琉球研究で扱われてこなかったことも通底している。<sup>7)</sup>

しかしその一方で、為朝の琉球渡来は、相当程度に琉球に内実化している。向象賢(羽地朝秀)が記した『中山世鑑』(一六五〇年)が「舜天御即位」の冒頭で、『保元物語』を長く引用しながら為朝の琉球渡来を記しているのはその一例であるが、知られるように為朝渡来伝承は古琉球末期に琉球を訪れた袋中(一六〇三年〜一六〇五年か)の『琉球神道記』(一六四八年)にも既に記されていて、当時の琉球において一定程度定着していた伝承だと推測される。『琉球神道記』と同時代の史料だと思われる『慶長見聞録案紙』が引く「八島の記」(「蘇長老と申五山之僧より」<sup>8)</sup>「内府様」に献上された書という)にも、「源為朝九州に御座候時相渡彼国王の聲に成子孫有之」とあって、為朝の琉球渡来伝承は日琉ともに知られた話になっていたと考えられる。月舟壽桂『幻雲文集』の「鶴翁字銘并序」に記される、為朝が琉球に渡来して「創業主」になったという「吾国」の「一小説」について、月舟が琉球僧鶴翁に尋ねたという「大永七年」(一五二七)の記事は、少なくともその頃には、本土日本において為朝の琉球渡来伝承が既に存在したことが窺われる。

一七九五年に土佐国幡多郡下田浦（四万十川河口の港）に漂着した「琉球人」からの聞書資料『琉球人話』（写本、安芸歴史民俗資料館蔵）には、為朝が「久高嶋ト申島」に上陸し「往古」よりこの島に住む「鬼神ヲ退治」して、島に「五穀」が少ない故に「本琉球」に渡って「大里親方」になり、「為朝ノ御子」が「十六歳」になった時に「御子」は「舜天王」になって、その子孫は「只今ノ中山王」まで続いているという記事を載せている。この聞書は、『中山世鑑』に記された為朝の記事が誤って伝えられたとも考えられそうであるが、聞書がいう為朝の久高島上陸は、為朝が「大里親方」になったこととも地理的な整合性がある（『世鑑』でも為朝が「大里按司ノ妹ニ通ジテ」とある）。さらに、為朝の子とされる舜天の神号「ソントン」は、『琉球国由来記』によれば久高島の対岸に位置する「喜名之嶽」（玉城間切中村渠村）の「神名 ソントンノマイケガ御イベ」や「喜名之嶽」に近い「当銘之嶽」（東風平間切当銘村）の「神名 ソントンノ御イベ」にしか出ない。これらを考えれば、聞書の記事はあながち誤ったものだとはいえない。むしろ、聞書の記事は、為朝の琉球渡来伝承が元来は北方から寄り来る神、アマミキヨ神話と重ねられた伝承としてあったことを物語っていると考えられる。琉球において為朝渡来伝承が内在化していったのは、そのような受容のされ方があったのではないか。「喜名之嶽」は、アマミキヨが落ち着いたとされるミントングスクに近い御嶽である。折口信夫が「琉球国王の出自―佐敷尚氏・伊平屋尚氏の関係の推測―」で論じたように、琉球を訪れる貴種は北方からやってくるのである。

実は、比嘉実が「沖縄における為朝伝説―独立論挫折の深層にあるもの―」で論じたことは、為朝琉球渡来を内在化させる「琉球」のアイデンティティーを問題にした論であった。かつて、加藤三吾が「琉球雑記（二）」（『東京人類学雑誌』第二〇二号、一九〇三年一月刊）や『琉球之研究 上』（魁成舎、一九〇六年刊）で、『中山世鑑』等に記された為朝琉球渡来にかかわる記事について、「保元物語を種子として好事家が捏造したものと思われない」と論じたのに対して、東恩納寛惇が都合六本にもわたる論文を書いて反論している。さらには、伊波普猷も

後に東恩納の主張に添った論を書き、真境名安興も為朝琉球渡来を否定しない記述をしている。<sup>63</sup> 戦前の琉球研究を担った三人の沖繩出身の碩学が、こぞつて為朝琉球渡来を受け入れているのは、想像以上にこれが琉球に深く根付いているからだと思われる。比嘉論文は、それを「琉球人」のアイデンティティーの問題として論じたのである。

本稿は、『弓張月』がこれまでの琉球研究で十分に扱われて来なかったことをふまえ、さらにいわゆる「琉球物」といわれる近世江戸期の本土日本の琉球資料のひとつとして『弓張月』を捉えて、これを琉球側の資料、視点で論じ、近世期の琉球認識の一端を明らかにしようとするものである。

### 〈琉球から見た『椿説弓張月』Ⅰ〉

馬琴が『椿説弓張月』を書くにあたって、琉球に関して直接利用した資料は、新井白石の『琉球国事略』、正徳三年（一七一三）に上梓された寺島良安の『和漢三才図絵』や明和二年（一七六五）にでた和刻本『中山伝信録』（徐葆光）、寛政二年（一七九〇）に上梓された森島中良の『琉球談』等であるとされる。<sup>64</sup> このうち、『弓張月』を書くに際して馬琴が特に利用した資料は、和刻本『中山伝信録』とそれを抜粋し読みやすいように書き改めた『琉球談』であると考えられる。『弓張月』はこの二書から登場人物のモデルを多く採っているが、そのモデルと登場人物との重なりとずれに『弓張月』のテーマが示されている。

いうまでもなく『弓張月』にでる為朝の子「舜天丸」のモデルは、『琉球談』「○開闢の始附鎮西八郎鬼が嶋へ渡る説」<sup>65</sup>の「舜天」、『中山伝信録』「中山世系」巻第三「舜天」<sup>66</sup>に記される「舜天」で、「舜天ハ日本人皇ノ後裔、大里按司朝公ノ男子ナリ。淳熙七年庚子、年十五屢く奇徴アリ。長シテ浦添按司ト為ル。人ソノ政ヲ奉シ、断獄違ハズ。天孫氏二十五世ノ政衰フヤ、逆臣利勇、寵ヲ恃ミ権ヲ執リ、其君ヲ鳩シテ自立ス。舜天之レヲ討チ利勇死ス。諸按司

推挙シテ位ニ即ク」(『中山伝信録』)と記される。『琉球談』は「大里按司朝公」について、割注で「大里按司は為朝の舅なり。もしくは、聳に官を譲りたるならんか」とし、本文で「朝公」は、「為朝の「為」を省きて称したるなるべし」とわざわざ記して、「舜天」が為朝の「男子」であることを明示している。しかし、『弓張月』では「舜天」が「大里按司ノ妹ニ通ジテ」誕生した「男子」(『中山世鑑』巻一)<sup>17</sup>であることを記していない。「舜天丸」は妻「白縫」との子で、「白縫」は為朝が九州に追われた時に世話になった「阿曾三郎忠国」(阿多忠国)の「女兒」とある。この違いが、『弓張月』の基本的なテーマに繋がる重要な問題である。また、優柔不断で愚かな王と描かれる「寧王」は、尚寧王がモデルであることはいうまでもないが、「寧王」は一六〇九年の島津侵攻時の国王であつて「天孫氏二十五世ノ政衰フ」時の王ではない。これは、後述する第一尚氏時代の人物とされる「毛国鼎」の登場などとともに、『弓張月』が琉球史の歴史的時間の推移の不整合が存在する「娯楽作品」であることを意味するが、舜天が登場する前代の王を「寧王」としたことも、『弓張月』のテーマと直接繋がる。さらに、「寧王」を操る「佞臣利勇」は、「天孫氏二十五世」の末裔の王を毒殺(「鳩」)した「逆臣利勇」がモデルである。しかし、『弓張月』では「逆臣利勇」が為朝親子と対峙する最大の敵役ではない。最大の敵役は、馬琴が独自に創造した怪僧「曠雲国師」である。「曠雲国師」は、『伝信録』や『琉球談』には記されていないのである。『弓張月』では、この怪僧が「天孫氏二十五世」の末裔「寧王」と「中婦君」を殺し、王位に就く。後述するが、勧善懲悪を内容とする「娯楽作品」『弓張月』の最大の敵役が「逆臣利勇」ではなく、「曠雲国師」を登場させたことが『弓張月』の基本テーマに繋がる問題であると考えられる。

この外に、『中山伝信録』第二「重陽宴」の記事に書かれる人物と『琉球談』「〇俳優」に書かれる人物をモデルにして、『弓張月』は幾人かの登場人物を描いている。『伝信録』の「重陽宴」は、冊封使節を歓待するために演じられた組踊「護佐丸敵討」と「執心鐘入」の内容が記されているのである。まず、「愚王寧王」に仕え最後は死に追いや



られる忠臣「毛国鼎」のモデルは、「護佐丸敵討」の主人公、「中城といへる所の按司、毛国鼎といへる人」（「忠臣護佐丸」）であり、「奸臣利勇」に加担して奸悪を極め、「毛国鼎」の妻「新垣」の腹を裂き赤子を取り出してそれを「中婦君」の子と偽って世継ぎにしようとした「託女の長」「阿公」の名は、国王に讒言して「忠臣護佐丸」を討つ「勝連の按司、阿公」（「逆臣阿摩和利」）から採っている。この「阿公」は実は「新垣」の母であることが、後に分かる。また、「毛国鼎」の子で為朝に仕え親の敵を討とうとした「鶴」と「亀」は、「毛公に二人の子あり、兄を鶴といふ十三歳、弟を亀といふ十二歳」がモデルである。モデルは「執心鐘入」からも採られ、「毛国鼎」の武芸の弟子で為朝に仕えた武人「陶松壽」は、「執心鐘入」の主人公「中城の姑場村といふ所の農家に、陶姓なる者あり。一子を松寿と名付く。齢まさに十五歳、誠に端麗の美少年」（「中城若松」）を採っている。

また、この外の登場人物としては、為朝の腹心、琉球出身としてでる「八町礫紀平治」がいるが、「八町礫紀平治」は『保元物語』上にでる「三町ツブテノ紀平治大夫」がモデルになっている。「紀平治大夫」は、為朝が九州から都に上る際付いてきた「廿八騎」のひとりであるが、『弓張月』でこれが為朝と一心同体、為朝の分身ともいえる役割を担う。「紀平治」が為朝の分身的存在であるのは、為朝の弓矢に対して礫という同じ飛び道具の名人であることから分かる。また、「三町ツブテ」から「八町礫」に飛礫の距離を延ばすのは、『保元物語』では「廿八騎」のひとりすぎなかった「紀平治大夫」が、『弓張月』では為朝に独り寄り添う腹心になったからである。他に「寧王」の妃として出る「中婦君」は、琉球の最高神女、聞得大君（琉球語、チフジン）であるが、これを「中婦君」と表記するのは『和漢三才図絵』である。『弓張月』は、これから聞得大君の表記を採ったと思われる。「中婦君」は、「佞臣利勇」と通じ「寧王」を操ろうとする敵役である。琉球からすると国王のヲナリ神として国王を守護する聞得大君が敵役として描かれるのは、いささか違和感を覚える。さらに、「寧王」の夫人「廉夫人」、「寧王」と「廉夫人」との娘「寧王女」も登場する。「寧王女」は、「男子」がいない「寧王」の世継ぎであるが、「寧王女」の世継ぎをめぐって

「佞臣利勇」と「中婦君」、さらに「阿公」がからんで「寧王女」の世継ぎを阻もうとするストーリーで、琉球を舞台とする『弓張月』の後半（「統篇」以降）は、展開する。

### 〈琉球から見た『椿説弓張月』Ⅱ〉

「鎮西八郎為朝外伝」と題される『椿説弓張月』は、知られるように特に後半の「統篇」以降が、源為朝が水俣から父、為義の仇を討つために船路により上京しようとして嵐に遭遇し琉球に漂着して、為朝の活躍により為朝の子「舜天丸」が王位に昇る物語である。しかし、この物語は「統篇」から琉球が舞台となるのではなく、前半「前篇」卷之三（第六回）において、既に為朝とその腹心で琉球出身の「八町礮紀平治」が、信西の命によって黄金牌を着けた鶴を探しに琉球に赴くという内容になっている。そこで、後半の展開において為朝の妻になる重要人物、尚寧王の娘、「寧王女」（春宮）と「寧王女」を産んだ尚寧王の夫人、「廉夫人」と出会っている。さらには、『椿説弓張月』の最大の敵役ともいえる「嚙雲国師」や「中婦君」の名も、既に出てくる。「寧王女」親子は「中婦君」の妬みをかい、王位継承者の象徴ともいえる二つの珠の一つを「中婦君」が「嚙雲国師」に盗ませたことにより失い、ためにその地位を追われて「庶人」となって、ひっそりと山中に暮らしているという設定になっている。第六回の結末は、為朝が探していた黄金牌を着けた鶴が「寧王女」親子のところへ飛んできていたことがわかり、かわりに為朝の懐にあった珠が（なぜ、為朝の懐に珠があったかは記されていないが）、「寧王女」のなくした珠である（と思われる）ことを知って、これと交換して為朝は都へ帰っていくという展開になっている。この部分にふれた記述は「統篇」卷之三（第三十七回）にできてきて、『椿説弓張月』の時系列上の展開は、「前篇」卷之三（第六回）が「統篇」卷之三（第三十七回）と繋がる設定になっている。前述したように、『椿説弓張月』は尚瀬王襲位の謝恩使の江戸立を当て込ん

だ琉球ブームのなかで作られた作品である。このことから、その当初から琉球が舞台となる構想の小説として執筆されたのである。

しかも、それは舞台となる琉球の登場が既に「前篇」にあつたということだけでなく、『弓張月』の基本的なテーマともいえる為朝親子による〈へりうきう〉の名付け替えによつて表現される〈琉球征服譚〉の布石が、「前篇」卷之三（第六回）の手前にある卷之二（第五回）に記されている。第五回に琉球出身という紀平治が父から聞かされていた話として、「琉球いにしへ流虬に作る。地界万濤蜿蜒として虬の水中に浮むがごとし。よりにこれに名づく。或はいふ開国の主 虬を伐て兩顆の珠を得たり。故に流虬又琉球と名つくるの異説あり」と語っている。また、「前篇」卷之三（第六回）ではさらに詳しく、「往古大平山の前の海に一ツの虬ありて、常に風雨を起し津波を致し、五穀を損ひ洲民を害する事多かりければ、先王ふかく愁ひて天地に祈禱し、みづから潮に浸りて彼虬を殺し、是を瓶架山の東壑に埋給ふ。今の舊虬山是なり。こゝに先王虬を殺し給ふとき、その腮を裂て二顆の珠を得給ひしが、その琉一顆を琉といふ。又一顆を球といふ。さればこの國を流虬と名つけしは、虬を切流し給ふに起り、又琉球と書事は、彼二顆の珠を表す」とある。これを「残篇」卷之四（第六十六回）では「大古天孫氏、はじめてこの國に王たりしとき、毒悪の巨虬ありて、変化通力疆なければ、民これが為に害せらる。よりに國の名を龍虬といへり。こゝに天孫氏、件の虬を殺して、民の為に害を除き、且その珠を獲て、これを琉球と名づけ、後遂に國の名とせり。されば珠を獲たる処を、玉城と唱、虬の骨を埋めたるところを、舊虬山といふ」と記している。すなわち、太古〈へりうきう〉は、「毒悪の巨虬ありて」民を悩ましていた。当時の國の名は「龍虬」「流虬」であつたが、「開国の主」「天孫氏」によつて「巨虬」は退治され、二つの珠を得て「琉球」と名付け替えたというのである。珠は「寧王女」が父、寧王から譲り受けた二つの珠で、「琉」と「球」は王位継承者が持つのである。

『弓張月』の最大の敵役は「佞臣利勇」ではなく「朦雲國師」であるのは、「朦雲」が怪物「禍」を操り、「愚王寧

王」と「佞臣利勇」と通じていた王妃「中婦君」とを殺させ王位を奪い、最終的に為朝親子と対峙したことによる。この「曝雲」こそが、「天孫氏」によって退治された「巨虬」の蘇りである。「曝雲」は「尚寧王、奇を好み給ふのあまり、虬墳を発き」(「統篇」巻之三、第三十六回)登場する。為朝・舜天丸父子がようやく征伐した「曝雲」の死骸を見ると「長五六丈可なる、虬龍」で、「琉球二顆の珠をば、腮の下に蔵たりと見えて、珠は傷口より出て地上」に現れたとある。「曝雲」が「琉球二顆の珠」を持っていたのは、いうまでもなく怪物「禍」を操り「寧王」を殺して王位を奪ったからである。これを為朝親子が退治したことにより二つの珠を取り戻し、為朝の子「舜天丸」が舜天となって王位に就くことになる。馬琴は二度に亘る「流虬」から「琉球」の名付けかえの物語を構想するなかで、「曝雲」という最大の敵役を設定した。すなわち、「天孫氏」による「巨虬」退治が、為朝親子によって再び行われることが「椿説弓張月」の基本的なテーマであり、それは「前篇」の巻之二・三に既に用意されていたのである。

しかし、重要なことはそれではない。二度に亘る「巨虬」退治は、単純な繰り返しの物語ではないのである。一度目は「大古天孫氏」によるものであるが、二度目は琉球との血の繋がりが無い為朝親子によるものである。「曝雲」の操る怪物「禍」によって殺された「寧王」は、「天孫氏二十五代、一万七千八百二年の正統」(「統篇」巻之六、第四十四回)であり、王位に就いた為朝の子「舜天丸」は「中山世鑑」巻一が記す「大里按司ノ妹ニ通ジテ」誕生した「男子」ではない。すなわち、「弓張月」に登場する「舜天丸」は、前述したように為朝が九州に追われた時に世話になった「阿曾三郎忠国」(阿多忠国)の「女兒白縫」との子であり、これが王位に就いた。つまりは、「禍」による「寧王」の死は、「二十五代」続いた「天孫氏」の断絶である。しかも、為朝が娶ることになった「寧王女」は、悪童に襲われことされるその時に、暴風に遭遇した為朝を助けるために入水した「白縫」(「統篇」巻之二、第三十一回)の靈魂が入った「寧王女」であり、体は「寧王女」であっても心は「白縫」であり、元の「寧王女」ではないのである(「統篇」巻之四、第四十回)。案の定、「曝雲」を討ち取った後、本来の世継ぎであった「寧王女」に王位を継ぐ

話しが振り向けられると、「寧王女」（白縫）は「心うきことな聞え給ひそ。わらはは旧の王女に侍らず」と堅く辞退している（『残篇』巻之五、第六十七回）。つまりは、「天孫氏」の血脈は「寧王」が「曠雲」の操る怪物「禍」に殺され、「寧王女」が悪童に襲われてことされた時に断絶しているのである。「舜天丸」の琉球王への襲位は、徹底して琉球の血を排している。これが、二度目の「巨虬」退治による王位回復の結末である。『椿説弓張月』は、大和人による琉球王朝征服の物語である。<sup>(19)</sup>

しかも、その物語を為朝が活躍した物語にしている。馬琴が参考にした『中山伝信録』は「天孫氏二十五世ノ政衰フヤ、逆臣利勇、寵ヲ恃ミ権ヲ執リ、其君ヲ鳩シテ自立ス。舜天之レヲ討チ利勇死ス」とのみ記しており、そこに為朝の活躍は記されていない。『琉球談』にいたっては、この記事に当たると記述はない。これは『中山世鑑』に為朝が「形見ノ物」を残し帰郷し、為朝の女房（大里按司ノ妹）と子（尊敦）は「浦添へノホリ草ノ庵ヲシメテソ日ヲ送りケル其子漸ク十年余リニモ成リヌレハ器量事カラ更ニ余人ニハ替リタリ依テ南宋淳熙七年庚子御歳十五ト申ス二国人是ヲ尊シテ浦添按司トソ成奉ル」と記される後に、「浦添按司」（尊敦）による「逆臣利勇」征伐が叙述されているからである。ただ、さすがに『弓張月』も「曠雲」を討つ最後の場面では「鬼が嶋には、千引の巖を射て碎き、大嶋には数百騎乗たる、兵船を射て沈めたり」という為朝の箭は「曠雲が胸板せめて礮と射るに、鏃碎けて飛散たり」と通ぜず、かわって「舜天丸は姑巴嶋にて、三所の神に齋祀りし桃の箭に、義家と識たる、黄金牌をとりそえつ、弓を満月のごとく彎固めて」射ると、「曠雲が吭碎て、篋ぶかにぐさと射込」て、「曠雲」が馬上より転落した後、為朝が「宝剣」によって「首を弗と搔落し」て討ちとるというようになっていく（『残篇』巻之四、第六十五回）。『弓張月』でも「曠雲」を討つたのは、「舜天丸」が放った「桃の箭」なのである。これはこの記述の前段において、「曠雲」を討ちとる軍議をする際、為朝の腹心の「八町礮平治」の「曠雲」攻略の提案が「松壽」によって退けられ、かわって「松壽」の案が「舜天丸」に支持されてそれを為朝が承認するという展開になっていることに、

既に暗示されている。加えて、「曝雲」を討ち取った「黄金牌をとりそえ」た「桃の箭」は、「姑巴嶋」で入手したものであるが、この「姑巴嶋」へ為朝を導き、「舜天丸」との再会を果たすのに活躍するのは、「佳奇呂麻（奄美大島加計呂麻島）の嶋長」「林大夫」である。「林大夫」は、「曝雲」との最初の戦いで敗れた為朝夫婦を救った人物であり（「残篇」巻之一、第五十七回）、再度の「曝雲」との戦いに際して、「佳奇呂麻人のみならず、由呂、烏奇奴、度姑嶋、小琉球の嶋人等」を「林大夫が催促にしたがつて」集めて、為朝を援助している。為朝は、一度目の「曝雲」との戦いに敗れ、「曝雲」の火攻めにあつて為朝は「死たる馬の腹を截割、その血を吸ふて咽喉を潤し、馬の腸を瓢出して、その腹中に躲れしかば、辛じて猛火に焼れず」難を免れた（「拾遺」巻之五、第五十六回）。その後、「林大夫」に救われて二度目の「曝雲」との戦いになるのであるが、ここには二度の渡来のかたちをとつて為朝の北からの琉球渡来が強調され、さらに北の援助・援軍による琉球征伐の構図が見て取れる。当然、一六〇九年の島津による琉球侵攻が背景にある。それはともかくとして、為朝中心の物語が漸く「曝雲」を討ち取る場面になつて、子の「舜天丸」の物語になろうとしているが、『弓張月』は「曝雲」の首を刎ねる役割を、やはり為朝にさせている。すなわち、『弓張月』が『中山世鑑』の叙述とは違つて、為朝の帰郷（崇徳院等の霊に迎えられて雲中に去る）を「曝雲」を討ち果たした後に設定している（「残篇巻之五、第六十七回」）のは、『弓張月』が為朝による琉球王朝征服の物語を主題としているからである。

### 〈まとめにかえて〉

前述したように、馬琴が『椿説弓張月』を書くにあたって琉球に関して直接利用した資料は、新井白石の『琉球国事略』、正徳三年（一七二三）に上梓された寺島良安の『和漢三才図説』や明和二年（一七六五）にでた和刻本『中

山伝信録』（徐葆光）、寛政二年（一七九〇）に上梓された森島中良の『琉球談』等であるとされる。『琉球談』の冒頭「○琉球国の略説」には「琉球国、古名は「流虬」といふ。『中山世鑑録』に云、「地の形、虬龍の、水中に浮ぶが如くなる故に名付たり」となん」とある。『琉球談』が記す『中山世鑑録』は、『中山伝信録』の誤りか。『中山伝信録』巻第四「琉球地図」に「琉球ハ始メ流虬ト名ク（中山世鑑ニ云ク、隋使羽騎尉朱寛、国ニ至ル。万濤ノ間ニ于テ、地形虬龍ノ水中ニ浮フガ如キヲ見ル。故ニ名ツク）隋書始メテ見ルニハ則チ流求ト書ス。宋史コレニ因ル。元史ニ瓊求ト曰フ。明ノ洪武中琉球国ニ改ム」とある。へへへに入る「中山世鑑ニ云ク」は、『伝信録』を記した徐葆光の注である。徐葆光は、琉球国の最初の正史『中山世鑑』巻一から「天孫氏」の記事の末尾箇所に記載される「我朝流虬ト名付ルハ天孫氏二十五代ノ御時異朝隋ノ煬帝利欲ニ慊ス中国ノ宝物ヲ掠取ノミナラス剩ヘ数千万艘ノ船ヲ作り目ニモ不<sub>レ</sub>見音ニモ不<sub>レ</sub>聞異国ヲ尋求シム此時隋使隋使羽騎尉朱寛初テ此国ニ至ル万濤ノ間ヨリ此地ヲ見レハ虬龍ノ水中ニ浮カ如シ依<sub>レ</sub>是隋人流虬トハ名付ル也去レトモ異国ノ人初テ来ル事ナレハ語言モ不<sub>レ</sub>通アリケレハ隋使モトカウ申合スル様モ無ク男子一人ヲ擒ニシテソ帰リケル」を引いている（傍線部が引用箇所）。ただし、『隋書』『東夷伝』『流求国』の記事は、「（大業）三年、煬帝、羽騎尉朱寛をして海に入りて異俗を求訪せしむ。何蛮之を言うや、遂に蛮と俱に往き、因りて流求国に到る。言の相い通ぜざれば、一人を掠して、而して返る」とあり、『中山世鑑』が記す「万濤ノ間ヨリ此地ヲ見レハ虬龍ノ水中ニ浮カ如シ依<sub>レ</sub>是隋人流虬トハ名付ル也」という記述は見あたらない。原田禹雄によれば、『中山世鑑』のこの叙述は夏子陽『使琉球録』（一六〇六年尚寧王冊封の使録）の影響を受けており、それも『使琉球録』の「附旧使録」に入る謝杰（一五七六年尚永王の冊封副使）の「琉球録撮要補遺」に記載される「琉球は古くは流虬の地と為す。万濤の間を介して遠く之を望むに蜿蜒の蟠旋して虬の水中に浮くがごとし。故に以て名を因す」（原文漢文）から引かれていて、『隋書』と謝杰の記述が、ないまぜになつて、『世鑑』の叙述があると指摘している。

『世鑑』がどうして「万濤ノ間ヨリ此地ヲ見レハ虬龍ノ水中ニ浮カ如シ依<sub>レ</sub>是隋人流虬トハ名付ル也」の一節を、夏子陽『使琉球録』に収められた「琉球録撮要補遺」から入れたのか、興味が持たれる。はつきりしたことは分らないが、『世鑑』が「隋ノ煬帝利欲ニ慚ス中国ノ宝物ヲ掠取ノミナス剩ヘ数千万艘ノ船ヲ作り目ニモ不<sub>レ</sub>見音ニモ不<sub>レ</sub>聞異国ヲ尋求シム」と記すように、「煬帝」に対して批判的な叙述をしていることは、注目される。これは「隋書」が「羽騎尉朱寬」を送った後、煬帝が「武賁良将陳稜・朝請大夫張鎮州を遣わして、兵を率いて」慰撫したが、「流求」が従わなかったために「稜、撃ちて之を走らしめ、進みて其の都に至る。頻りに戦いて皆な敗る。其の宮室を焚き、其の男女数千人を虜にし、軍実を載せて、而して還る。爾れ自り遂に絶ゆ」と記していることと関連していると考えられる。『中山世鑑』も「武賁良将陳稜ヲ大将トシテ数万ノ兵船ヲ差遣シテソ攻タリケルサレトモ流虬人不<sub>レ</sub>従有ケレハ又男女五百人ヲ擒ニシテソ帰リケル」と記している。

すなわち、『世鑑』は軍を派遣して「流求」に侵攻し、王城を焼き払って「男女数千人」をも捕虜にした皇帝として「煬帝」を捉え、さらにはこの後「天孫氏世衰政廢シテ諸侯叛者多シ依テ逆臣利勇弒<sub>レ</sub>君奪<sub>レ</sub>位事アリ尊敦其比ハ浦添按司タリ」というように、為朝が登場し為朝の子「舜天尊敦」の叙述に展開していく。『世鑑』の「天孫氏世衰政廢シテ諸侯叛者多シ」という記事は、文脈からいえば『隋書』の「其の宮室を焚き、其の男女数千人を虜にし、軍実を載せて、而して還る。爾れ自り遂に絶ゆ」という「武賁良将陳稜・朝請大夫張鎮州」の「流求」侵攻に起因しているように理解される。同様に「琉球録撮要補遺」の叙述がどのような根拠、もしくは出典があるのかは不明だが、『世鑑』が描く貪欲な「煬帝」の記述の延長にある「隋使羽騎尉朱寬」が「へりうきう」を捉える眼差しとして、「万濤ノ間ヨリ此地ヲ見レハ虬龍ノ水中ニ浮カ如シ」があり、これによって「依<sub>レ</sub>是隋人流虬トハ名付ル也」という命名があるということである。羽地は「煬帝」が軍を送って侵攻する中華の化外の地としてある「へりうきう」を、夏子陽『使琉球録』に入る「琉球録撮要補遺」の一節から『世鑑』に入れて、「流虬」と記したのではなかったか。



さらに言えば、『中山世鑑』巻一「舜天御即位」は、為朝の琉球上陸を（「為朝は）永万ノ比島嶼ヲ征伐シ給ノ次ニ舟潮流ニ從ヒテ始テ流虬ニ至リ給依テ流虬ノ字ヲ更テ流求ト名付給流求ノ者トモ音ニモ不聞日本人鎧ヲ著弓箭ヲ帶シタル勢ニ辟易シテ從之事草ノ葉ノ風ニ靡クニ不異」と記しており、為朝の命名による征服譚になっている。つまりは、「流虬」という蛇体の鳥から為朝が流れに委ねて求めた、為朝の撰んだ鳥「流求」という命名による征服譚である。これは、『保元物語』の最終部にある「為朝鬼島ニ渡ル事并ビニ最後ノ事」に記される「鬼島」から「葦島」に名を付け替える為朝の武威による住人の屈服譚を、羽地が『世鑑』に取り入れたのではないかと考えられる。<sup>22</sup>『中山世鑑』は、天孫氏が築いていた（へりうきう）が「煬帝」の侵攻によつて「世衰政廢」したのを、為朝の渡琉によつて秩序を回復する物語になっているように読める叙述をしている。

馬琴が『世鑑』を読んでいたとするならば、『椿説弓張月』はまさに『中山世鑑』巻一の「天孫氏」の「世衰政廢」から「舜天御即位」までの記事を参考にして、島津侵攻の時代（一六〇九年の尚寧王の時代）に重ねて書いた「勸善懲惡」、「通快娯楽」小説だと考えられる。ただし、『世鑑』は比較的早く日本に渡っているものの、馬琴がそれを手にしていたことは確認できない。手にしていなければ、馬琴が参考にしたと思われる『琉球国事略』にある「二条院永万年中為朝海に浮て流に随ひて国を求め流虬国に至る（割注、省略）国人其武勇に畏れ服し其国の名を改め琉球と名づけてつひに大里按司の妹にあひぐして舜天王をうむ」等<sup>23</sup>を利用したかもしれない。いずれにしろ、羽地にしても馬琴にしても「地形虬龍ノ水中ニ浮フガ如キ」という「流虬」は、克服されなければならない国名であったのである。

為朝の琉球渡来伝承は、近世期の日本において相当に広がりを持っていたと想像される。白石の『南島志』（一七一九年）においても「保元之乱に故將軍源朝臣義家の孫廷尉為義の子為朝、伊豆州に竄る。平氏の擅權に及んで、朝政日に衰ふるや、常に憤憤として祖業に復さんと欲す。因りて海上に浮かび、諸島之地を略し、遂に南島に至

る。為朝、人と為り魁岸絶力、猿臂射を善くす。南島人、皆以て神となし服せざる莫し。乃ち其の地を狗へて還る。居ること未だ幾ばくならざるに、官兵之れを襲ひ攻め、竟に自殺す。遺孤、南中に在る有り。母は大里按司の妹なり」(巻之上、世系第二)<sup>(23)</sup>とあり、為朝は琉球に渡来して琉球を従えた後、伊豆に還って自害したとしている。白石の『南島志』を受けた伴信友も、『中外経緯伝草稿』(一八四八年)で前述した「八島の記」を使って為朝の琉球渡来を記している。為朝の琉球渡来の記事は『琉球談』(一七九〇年)以前の資料でも、例えば『弓張月』自身が引く『公益俗説弁』(井沢長秀、一七一五年)や『本朝怪談故事』(厚督春鶯廓玄、一七一六年)でも見られる。両書は、知識層を越えた庶民的な人々にも享受された書物であると思われる。さらに、注目されるのは浄瑠璃作家、紀海音が、為朝の琉球渡来を題材にした「鎮西八郎唐土船」(一七二〇年)を『弓張月』がでる九十年程前に世に出していることである。「鎮西八郎唐土船」は、保元の戦いに負けた為朝が「一の宮重仁親王」を伴って、琉球国を目指して日本を離れるが、すぐには着けず「唐土中華」をさまよひ「女護島」にたどり着く。するとそこが、琉球だったというもので「重仁親王」は「琉球王の一人姫」と結ばれ、為朝は「こうひ將軍」と名を改めて「子々孫々迄守り神」になるというものである。<sup>(24)</sup> 作品は、琉球にかかわる「第四 親王船路」以下が最後につくかたちになっており全体が琉球に絡んではないが、『弓張月』以前にこのような浄瑠璃があったことは興味深い。為朝渡来に絡むこのような作品が、『弓張月』以前に他にもあった可能性が考えられる。

先に紹介した一七九五年に土佐国幡多郡下田浦(四万十川河口の港)に漂着した「琉球人」からの聞書資料『琉球人話』においても、「右寺(筆者注、崇元寺のこと)正面ニ為朝公ノ御位牌アリ其側ニ大カリマタノ矢ノ根一本アリト云」と記されているが、一七六二年の土佐に漂着した「琉球人」からの聞書資料『大島筆記』においても「一鎮西八郎為朝ノ鏃アリトガリ矢也長七寸計也為朝ノ社トテ別段ニハ無トイヘリ」(第三、雑話上)<sup>(25)</sup>という記事がある。これを考えれば、土佐側の役人達は為朝の琉球渡来を前提にして、「琉球人」に質問していると考えてよい。為朝を

祀る社や為朝の位牌が琉球にあるとする記事は、『定西琉球物語』（西尾市立図書館岩瀬文庫）や西川如見『増補華夷通商考』（一七〇八年）にも見られる。<sup>28</sup> それほどに、為朝の琉球渡来はよく知られた「琉球言説」なのである。馬琴が『椿説弓張月』を書くのに際し、直接に利用した『琉球談』はそもそも「儒学者服部蘇門」が序文を記す和刻本『中山伝信録』を読みやすいように書き改めた書である。横山学は和刻本が「当時世上で論議のあつた「為朝渡琉説」の裏付けとしてこの「中山伝信録」に注目し、また、琉球の国事を紹介する書物が無い事を感じて重刻するに至つた」と指摘し、森島の『琉球談』もそれを受けたものと記している。<sup>29</sup>

馬琴の『鎮西八郎為朝外伝 椿説弓張月』は、当時既に知られていた為朝の琉球渡来譚に乗つて書かれた「娛樂小説」であつた。『弓張月』は琉球使節の江戸立に湧くブームの中でよく読まれ、さらに為朝琉球渡来の言説が拡大されたと推測される。しかしながら、為朝を迎え討つ「霧雲」が毒突く「汝は是、東方の浮浪人、身のおき所なきま、に、この国へ漂着し、王女と密通して、国王の婿と称し、勢ひに乗じて大臣を殺し、王子を逐ふて、山南を押領す」（拾遺卷之五、第五十六回）は、見方をかえれば琉球の地霊の叫びである。この叫びは、「勸善懲惡」「通快娛樂」小説の享受者には伝わらなかつたのである。

## 【注】

- (1) 後藤丹治校注『日本古典文学大系 椿説弓張月』上、岩波書店、一九五八年「解説」。
- (2) 拙論「『琉球神道記』にかかわる「琉球言説」」（『立教大学日本学研究年報』第十二号、立教大学日本学研究所、二〇一四年刊行）。
- (3) 池宮正治「沖繩芝居参上―明治二十六年京阪・名古屋公演―」（『新琉球史 近代・現代編』琉球新報社、一九九二年刊）。
- (4) この外に、伊波の未完・未発表の論文に「弓張月に現れた琉球語の考察」（『全集』第八卷所収）があるが、『弓張月』にある

琉球語にふれた箇所は冒頭の部分だけで、全体はオキナワとウルマの語源に言及した論になっている。また、池宮の論文は、論文を掲載誌に載せる際に脱文があると思われる、残念ながら十六頁から十七頁の内容が繋がっていない。

(5) 嘉手刈千鶴子『おもとと琉歌の世界―交響する琉球文学』森話社、二〇〇三年刊。

(6) 拙論『「大島筆記」 附録所収の「琉球歌」』『立正大学人文科学研究年報』第四十七号、二〇〇九年刊において、『大島筆記』が「今日の誇らしやや」を含む五十六首の琉歌に正確な注が記されていることを論じている。これは琉球側の潮平親雲上等が琉歌を書面で書き出し、それについて土佐側の戸部達が細かく意味を尋ねてなった資料であると考えられる。『大島筆記』所収の「琉球歌」は、本土日本の近世期にあつて極めて例外的な琉歌理解の資料であり貴重である。

(7) この問題は、池上永一の『テンペテス』をめぐって、作品が琉球史の実体を反映したものでないという批判が多くなされたことと繋がるといえる。『テンペテス』に対する学術的な批判としては、例えば西里喜行『「テンペスト」考―小説と史実の間―』（『南島文化』第三十四号、沖縄国際大学南島文化研究所、二〇一二年刊）があり、小説が史実と乖離している点や、歴史的時間の推移の不整合が存在する点等を指摘している。なお、『テンペテス』は『椿説弓張月』を種本にして書かれた作品だと思われる。

(8) 南和男改題『内閣文庫所蔵史籍叢刊 慶長見聞録案紙 慶長日記 慶長・元和年録』汲古書院、一九八六年刊。

(9) 拙論「琉球の「為朝伝承」」『立正大学國語國文』第五十一号、立正大学國語國文学会、二〇一三年刊。

(10) 折口信夫「琉球国王の出自―佐敷尚氏・伊平屋尚氏の関係の推測―」（『南島論叢』沖縄日報社、一九三七年刊）。

(11) 比嘉実「沖縄における為朝伝説―独立論挫折の深層にあるもの―」『文学』季刊第三卷三号、岩波書店、一九九二年刊。

(12) 加藤三吾『琉球の研究』未來社、一九七五年刊。

(13) (9) に同じ。

(14) (1) に同じ。「琉球方面の書としては『琉球神道記』『中山世養図』『中山世譜』『琉球聘使記』『定西法師物語』などの書名

が弓張月に現われているが、馬琴はこれらの諸書は間接に琉球談もしくは中山伝信録から孫引していて、直接にはその原本を見てはいないようである」とある。

- (15) 石上敏校訂『叢書江戸文庫32 森島中良集』国書刊行会、一九九四年刊。
- (16) 企画部市史編集室『那覇市史 冊封使録関係資料(読み下し編)』資料篇第一巻三、那覇市役所、一九七七年刊。
- (17) 沖縄県教育庁文化課『重新校正 中山世鑑』沖縄県教育委員会、一九八三年。
- (18) 栃木孝惟他校注『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』岩波書店、一九九二年刊。
- (19) 小峯和明「侵略文学」としての〈薩琉軍記〉と為朝神話(拙編著『琉球 交叉する歴史と文化』勉誠出版、二〇一四年刊) 所収では、「侵略文学」という言葉を使って、『薩琉軍記』といわれる一群の資料や「為朝神話」を捉えている。『椿説弓張月』は、まさに大和人による琉球侵略の文学である。
- (20) 野口鐵郎『中国と琉球』開明書院、一九七七年刊。
- (21) 原田禹雄訳注『徐葆光 中山伝信録』榕樹社、一九九九年刊。
- (22) (9) に同じ。
- (23) 『球陽』附巻二「尚貞王三十年」(一六八九)に「琉球世鑑を薩州に呈覧す」という記事があり、かなり早い時期に『中山世鑑』は日本に渡っている。
- (24) 新井白石『新井白石全集』第四巻、国書刊行会、一九〇六年刊。
- (25) (24) に同じ。
- (26) 水谷弓彦校訂『紀海音浄瑠璃集』帝国文庫、博文堂、一八九九年刊。なお、この資料は立正大学非常勤講師小此木敏明氏に教えられた。
- (27) 国会図書館所蔵『大島筆記』。

(28) (9) 参照。

(29) 横山 学「琉球物と琉使来聘」(宝玲叢刊第四集 江戸期琉球物資料集覧 第四卷、本邦書籍、一九八一年刊)。

\*なお、本稿は注2の拙論と連続するテーマを扱った論である。併せて読んでいただければ、幸いである。